

# デート DV 被害及び加害経験と性交渉による肯定的な情動体験の関連

The Relationship between Dating Violence Victims and Assaults and  
the Positive Emotional Experiences of Intercourse

井ノ崎敦子, 上野 淳子, 松並 知子, 赤澤 淳子, 青野 篤子, 葛西真記子

INOSAKI Atsuko, UENO Junko, MATSUNAMI Tomoko, AKAZAWA Junko, AONO Atsuko and KASAI Makiko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 32 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.32, Feb., 2018

## デート DV 被害及び加害経験と性交渉による肯定的な情動体験の関連

## The Relationship between Dating Violence Victims and Assaults and the Positive Emotional Experiences of Intercourse

井ノ崎敦子\*, 上野 淳子\*\*, 松並 知子\*\*\*, 赤澤 淳子\*\*\*\*, 青野 篤子\*\*\*\*, 葛西真記子\*\*\*\*\*

\* 〒 673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1 兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科

\*\* 〒 583-8501 大阪府羽曳野市 学園前 3-2-1 四天王寺大学

\*\*\* 〒 663-8137 兵庫県西宮市池開町 6-46 武庫川女子大学

\*\*\*\* 〒 729-0292 広島県福山市東村町三蔵 985-1 福山大学

\*\*\*\*\* 〒 772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748 鳴門教育大学

INOSAKI Atsuko\*, UENO Junko\*\*, MATSUNAMI Tomoko\*\*\*,

AKAZAWA Junko\*\*\*\*, AONO Atsuko\*\*\*\* and KASAI Makiko\*\*\*\*\*

\* Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)  
942-1 Shimokume, Kato-shi, Hyogo 673-1494, Japan\*\* Department of Sociology, Faculty of Humanities and Social Sciences, Shitennoji University  
3-2-1, Gakuenmae, Habikino-shi, Osaka, 583-8501, Japan\*\*\* School of General Education, Mukogawa Women's University  
6-46, Ikebirakicho, Nishinomiya-shi, Hyogo, 663-8137, Japan\*\*\*\* Faculty of Human Cultures and Sciences, Fukuyama University  
985-1, Sanzo, Higashimuramachi, Fukuyama-shi, Hiroshima, 729-0292, Japan\*\*\*\*\* Naruto University of Education  
748, Nakajima, Takashimaui, Narutocho, Naruto-shi, Tokushima, 772-8502, Japan

**抄録：**人は青年期において恋愛や性への関心を高め、他者と親密な恋愛関係を結ぶようになる。恋愛関係は深い相互作用を伴う対人関係であるため、その中で生じる肯定的体験も否定的体験も比較的情動的影響が深いものとなる。デート DV は恋愛関係で生じる否定的体験の中でも最も深刻な体験の一つである。また性交渉は青年の恋愛関係において一般的であり、カップルの関係性の質によって肯定的体験にも否定的体験にもなり得る。そこで本研究では、デート DV 被害及び加害経験と性交渉による肯定的な情動体験との関連について検討をすることを目的に、性交渉による肯定的な情動体験尺度の開発を行い、デート DV 被害及び加害経験と性交渉による肯定的な情動体験尺度得点との関連を検討した。その結果、ほとんど全てのデート DV 経験にジェンダー差が見られ、デート DV 被害及び加害経験と性交渉による肯定的な情動体験との間に関連があることが見出された。

**キーワード：**デート DV 性交渉による肯定的な情動体験 恋愛関係

**Abstract :** Young people are usually interested in romantic relationships and sexuality and usually form romantic relationships. Because romantic relationships involve deep interaction, both positive and negative experiences in romantic relationships tend to lead to deep emotional effects among young people. Dating violence is one of the most negative experiences in a romantic relationship. Intercourse may become either a positive or a negative experience. We examined the relationship between dating violence victims, assaults, and the positive emotional experiences of intercourse. We developed three hypotheses: (1) Couples who have intercourse experience more instances of dating violence and assaults than couples who do not have intercourse; (2) The larger the extent of dating violence among young victims, the fewer their positive experiences of intercourse in their romantic relationship; and (3) The larger the extent of assaults in dating violence among young victims, the fewer their positive experiences of intercourse in their romantic relationship. The hypothesis of this study were partially supported, but gender differences existed in almost all victims and all instances of assaults of dating violence.

**Keywords :** dating violence, positive emotional experiences of intercourse, romantic relationship

## I. 問題と目的

人は青年期において恋愛や性への関心が高まり、次第に他者と親密な恋愛関係を結ぶようになる（伊福・徳田, 2006）。2015年に実施された第15回出生動向調査（国立社会保障・人口問題研究所, 2017）では、20歳から24歳の男性の約2割、女性の約3割が異性と交際していると回答している。また、明治安田生活福祉研究所（2016）の調査では、20代男性の約5割、20代女性の約7割が交際経験をもっていることが明らかにされている。さらに20代前半では、現在も約8割の者が結婚願望をもっており（国立青少年教育振興機構, 2016）、恋愛や結婚というテーマは現在も青年の重要な人生テーマの1つである。

恋愛関係の相互依存性は他の対人関係よりも強い（今野, 1999）、その中で生じる情動体験は肯定的にも否定的にも情動的影響の深いものになりやすいと考えられる。立脇（2005）は、恋愛関係にある者は、友人関係にある者に比べると恋愛感情や関係満足度といった肯定的感情も攻撃・拒否といった否定的感情もどちらも多く体験することを見出した。つまり、恋愛関係において、青年が生きる意味を感じるといった肯定的体験を得る半面、交際相手を受け容れられないといった否定的体験も得るのは一般的なことであり得る。この恋愛関係における否定的体験の1つにデートDVがある。デートDVとは主に青年カップル間で生じる暴力のことを指す。わが国において女性の約5人に1人、男性の約10人に1人がデートDVの被害を受けており（内閣府, 2015）、身近な恋愛問題である。ただし、デートDVはその被害により精神的問題を抱えることも多く（Soller et al, 2017）、否定的体験のうちでも極めて深刻な体験の1つである。しかし、恋愛関係においては交際相手への恋愛感情により交際相手を実際よりも美化することで暴力を過小評価してしまい、暴力に対して加害者も被害者も明確な危機感を抱くことができず、知らず知らずのうちに状況が悪化し、被害を受けた者に深い心の傷を負わせるだけでなく、2人の関係を取り返しのつかない方向に導いていくことになりやすい。そこで、恋愛感情の影響でデートDVを過小評価し、気づいたときには深刻な状況になってしまうことのないようにしなければならない。そのためには青年自身が普段からデートDVについて適切に理解し、デートDVへの感度を高めておくことが肝要である。

通常、青年期にある者が恋愛関係において交際相手と性交渉をもつよう求めることは自然なこととして考えられている。実際、恋愛関係における性交渉と限らないが、20歳から24歳の男性も女性も約半数が性交渉経験をもっていることから（国立社会保障・人口問題研究所, 2017）、恋愛関係において若者が性交渉経験をもつこと

は一般的であると予想される。

性交渉は互いの心身の境界をはずして心身の一時的融合を図る行為であるため、恋愛関係において最も深い相互作用が生じる場面の1つになりうる。性交渉経験をもつことは互いの信頼を深める可能性が生じるといった肯定的効果をもたらす（齋藤・木村, 2000）。その一方で性交渉を経験すると、情動的な激しさの増大によって親密性が増加するとともに、交際相手への影響力をもちたいという欲求も高まり、恋愛関係における暴力のリスクが増加する。そのため性交渉経験のあるカップルのほうが性交渉経験のないカップルよりもデートDVを経験しやすい（Kaestle & Halpern, 2005）。Tolman and McClalland（2011）は、標準的な青年期のセクシュアリティは基本的に肯定的側面と否定的側面の両面を備えていることを主張している。従って、性交渉そのものはカップルの関係性の質により肯定的体験にも否定的体験にもなる可能性があり、その体験の質は恋愛関係にある2者の関係性の質が如実に反映されると考えられる。まとめると、性交渉をもつことによってデートDVの起こるリスクが高まり、さらに性交渉をもつ場合、その性交渉経験の質によってはさらにデートDVの起こるリスクが高まると考えられる。

以上のことから、デートDVが存在する場合としない場合では、性交渉による肯定的な情動体験に違いがみられることが予想される。なお、本研究での性交渉による肯定的な情動体験とは、性交渉経験により個人にもたらされる肯定的な情動体験と定義される。つまり、デートDVの被害及び加害経験が性交渉による肯定的な情動体験の低下をもたらすと同時に、性交渉による肯定的な情動体験の低さがデートDV被害及び加害経験の増加をもたらすといった、相互作用が生じると考えられる。

そこで本研究ではデートDV被害及び加害経験と性交渉による肯定的な情動体験との関連を検討する。

具体的には主に次の3点の仮説について検討する。

- ① 性交渉のあるカップルのほうが、性交渉のないカップルよりもデートDV被害経験、加害経験ともに多い。
- ② デートDV被害経験の多さは性交渉による肯定的な情動体験の少なさと関連する。
- ③ デートDV加害経験の多さは性交渉による肯定的な情動体験の少なさと関連する。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

中国、近畿、北陸地方の4年制大学および短期大学に所属する616名（女性461名、男性141名、その他1名、不明13名）を対象とした。平均年齢は19.97歳、年齢の分布は18歳から24歳であった（SD = 1.01）。分

析対象はこれまでに交際経験があると回答し、欠損値がない343名（男性67名、女性276名、平均年齢20.03歳、 $SD = 0.99$ ）である。

## 2. 調査方法

個別記入方式の質問紙調査で実施された。授業中に調査用紙を配布し、その場で回答させるかまたは後日回収とした。

## 3. 調査項目

### 1) デートDV被害経験

デートDVで用いられる暴力行為の種類及び被害経験度を測定するため、赤澤他（2017）のデートDV被害経験を測定する尺度を用いた。この尺度は身体的暴力3項目、性的暴力3項目、交際相手を服従させるといった精神的暴力3項目、交際相手を孤立させる精神的暴力3項目、相手の自尊感情を低下させる精神的暴力6項目の計18項目からなる。これらの項目について“あなたはこれまでに恋人から以下の行為を受けたことがありますか”と尋ね、「これまでに一度もない（1点）」から「20回以上（7点）」の7件法により回答を求めた。なお、交際した恋人が複数いる場合はその中のひとりについて回答するよう教示した。赤澤他（2017）において「身体的暴力・脅迫（以下、身体・脅迫とする）」、「性的暴力」、「自尊感情低下」、及び「孤立」の4つの下位尺度に分かれることが見出されたため、本研究でもこの分類を採用した（表1）。

### 2) デートDV加害経験

1)と同様の尺度を用いて、各項目に対し、“あなたはこれまでに恋人に下の行為を行ったことがありますか”と尋ね、「これまでに一度もない（1点）」から「20回以上（7点）」の7件法により回答を求めた。なお下位尺度は被害経験のものと同じ形を採用した。

表1 デートDV尺度

下位尺度	項目
身体・脅迫	物をあなたに向かって投げられる げんこつや怪我をさせるようなもので殴られる 顔や身体を平手で殴られる 殴るふりや、物を投げるふりをしてあなたを脅す 別れるなら死んでやると言われる
性的暴力	性交を強要される あなたが性交渉に応じないと不機嫌になる 無理矢理キスされたり、身体に触られたりする
自尊感情低下	あなたを否定したり、意見を認めなかったりする 自分が怒る原因はあなたにあると、相手から責められる 相手の意に沿わないと無視される 大声で怒鳴られる あなたの身体的な特徴について悪口を言ったり、見下した 言い方をしたりする あなたを人前で侮辱したり、ののしったりする あなたに無断で携帯メールや着信履歴を見られたり、消されたりする
孤立	いつも一緒にいることを要求される 友人との付き合いを制限される いつも行き先を告げさせられたり、報告させられたりする

### 3) 性交渉経験の有無

交際相手との性交渉経験について“交際相手との間に性交渉（セックス）の経験はありますか（ありましたか）？”と尋ね、「はい」か「いいえ」のどちらかを選ばせた。その後、性交渉経験があると回答した者に対してのみ性交渉による肯定的情動体験尺度への回答を求めた。

### 4) 性交渉による肯定的情動体験尺度

性交渉による肯定的な情動体験を測定するために、伊福・徳田（2008）と齋藤ら（2000）を参考に自己信頼の高まりを示す5項目、交際相手への信頼の高まりを示す5項目からなる計10項目の尺度を作成した（表3）。これらの項目に対し、“あなたの考えに最も近いものを選んでください”と教示し、「思わない（1点）」から「そう思う（4点）」の4件法により回答を求めた。

## 4. 倫理的配慮

調査協力者に対して、質問紙のフェイスシートの中で、この調査は対人関係についての研究を目的とする旨を記載した。さらに調査は匿名で行い、回答結果は統計的に処理するため、個人が特定されることは一切無いこと、参加は自由であること、参加しなくても不利益は生じないこと、回答したくない質問をとばしたり回答を中断したりしても構わないことを伝えた。さらに、調査協力者の中にデートDV被害者も含まれている可能性もあったため、質問紙の末尾に地域のデートDV相談機関を記載し、切り取って持ち帰ることができるようにした。なお、本研究は「福山大学学術研究倫理審査委員会」に倫理審査書類を提出し、承認を得ている（通知番号H28-ヒト・2号）。

## III. 結果

解析は以下の手順で行った。まずジェンダーと性交渉経験の有無によるデートDV被害経験及び加害経験の差の比較を分散分析で検討した。次に性交渉による肯定的情動体験尺度の構造を因子分析によって検討し、性交渉による肯定的な情動体験におけるジェンダー差をt検定により検討した。最後に、ジェンダーと性交渉による肯定的な情動体験の高低によるデートDV被害経験及び加害経験の差の比較を分散分析で検討した。

### 1. ジェンダーと性交渉経験の有無によるデートDV経験の差

#### 1) デートDV被害経験

ジェンダーと性交渉の経験の有無でデートDV被害経験に差があるかについて検討するために2要因分散分析を行ったところ、すべての被害経験においてジェンダーの主効果が有意であった（身体・脅迫： $F(1,339) = 20.62$ ,

$p < .001$ ; 性的暴力:  $F(1,339) = 6.08$ ,  $p < .01$ ; 自尊感情低下:  $F(1,339) = 6.47$ ,  $p < .01$ ; 孤立:  $F(1,339) = 10.47$ ,  $p < .001$  (表2)。さらに、すべての被害経験において性交渉の主効果が有意であった(身体・脅迫:  $F(1,339) = 12.09$ ,  $p < .001$ ; 性的暴力:  $F(1,339) = 12.58$ ,  $p < .001$ ; 自尊感情低下:  $F(1,339) = 8.28$ ,  $p < .01$ ; 孤立:  $F(1,339) = 6.05$ ,  $p < .01$ ) (表2)。この結果と平均値から、男性は女性よりもデートDV被害経験が多く、性交渉経験をもつ者はもたない者よりもデートDV被害を受けることが多いと解釈することができる。

## 2) デートDV加害経験

ジェンダーと性交渉の経験の有無でデートDV加害経験に差があるかについて検討するために2要因分散分析を行ったところ、「性的暴力」、「自尊感情低下」及び「孤立」においてジェンダーの主効果が有意であった(性的暴力:  $F(1,339) = 6.08$ ,  $p < .01$ ; 自尊感情低下:  $F(1,339) = 13.68$ ,  $p < .001$ ; 孤立:  $F(1,339) = 7.95$ ,  $p < .01$ ) (表2)。さらに「身体・脅迫」と「性的暴力」において性交渉の主効果が有意であった(身体・脅迫:  $F(1,339) = 9.84$ ,  $p < .01$ ; 性的暴力:  $F(1,339) = 9.35$ ,  $p < .01$ ) (表2)。この結果と平均値から、男性は女性よりも「身体・脅迫」以外のデートDV加害経験が多く、性交渉経験をもつ者はもたない者よりも「身体・脅迫」と「性的暴力」加害に及ぶことが多いと解釈することができる。

表2 性交渉経験の有無によるデートDVの差

性別	男性		女性		主効果		交互作用	
	あり	なし	あり	なし	ジェンダー	性交渉		
被害	性交渉経験							
	身体・脅迫	11.19 (5.72)	9.00 (4.96)	8.38 (4.58)	6.48 (3.14)	20.62***	12.09***	0.07
	性的暴力	6.47 (4.03)	5.00 (2.91)	5.46 (3.54)	3.91 (2.18)	6.08**	12.58***	0.01
	自尊感情低下	12.06 (7.80)	10.23 (6.29)	10.47 (5.22)	8.15 (4.05)	6.47**	8.28**	0.73
	孤立	6.28 (4.12)	5.58 (3.33)	5.26 (3.28)	3.90 (2.25)	10.47***	6.05**	0.63
加害	身体・脅迫	8.00 (5.28)	7.06 (4.13)	7.68 (4.06)	5.55 (1.70)	3.54	9.84**	1.49
	性的暴力	5.11 (3.19)	4.52 (2.83)	4.83 (3.13)	3.31 (0.85)	4.63*	9.35**	1.78
	自尊感情低下	8.81 (3.87)	8.84 (5.21)	7.79 (2.32)	7.23 (1.02)	13.68***	0.54	0.69
	孤立	4.56 (2.70)	4.52 (2.41)	4.20 (2.29)	3.35 (0.90)	7.95**	2.76	2.30

上段: 平均値 下段: 標準偏差  
\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

## 2. 性交渉による肯定的情動体験尺度の因子構造

性交渉による肯定的な情動体験の全体的構造を検討するために、10項目の得点について、因子分析(主因子法、固有値1以上の因子についてバリマックス回転)を行った。その結果、2因子が抽出された。各因子の回転後の寄与率は、第1因子が34.52%、第2因子が29.79%で、累積寄与率は64.31%であった。表3に性交渉による肯定的情動体験尺度の因子構造を示した。

各因子への負荷量が.50以上の項目について、各項目の得点を因子ごとに加算したものを尺度得点とした。 $\alpha$

係数は、第1因子 $\alpha = .91$ 、第2因子 $\alpha = .87$ であり、いずれの因子においても高い信頼性が確認できた。

第1因子に負荷量の高い項目としては、「交際相手への思いが強くなった」「恋人との心理的距離が縮まった」「恋人を特別な存在に感じるようになった」など交際相手への信頼の高まりを示す5項目で構成されていたので、「交際相手への信頼の高まり(以下、相手信頼とする)」と命名した。一方、第2因子に負荷量の高い項目としては、「ちょっとしたことで喜びを感じる」「他人にやさしくなった」「自分に自信がもてるようになった」など自分への信頼の高まりを示す5項目で構成されていたので「自己への信頼の高まり(以下、自己信頼とする)」と命名した。

表3 性交渉による肯定的情動体験尺度の因子構造

	第1因子	第2因子	共通性
【第1因子】交際相手への信頼の高まり(相手信頼) $\alpha = .91$			
1 性交渉経験後のほうが経験前よりも交際相手への思いが強くなった	.89	.25	.86
2 性交渉経験後のほうが経験前よりも恋人との心理的距離が縮まった	.83	.23	.74
4 性交渉経験後のほうが経験前よりも恋人を特別な存在に感じるようになった	.80	.28	.72
3 性交渉経験後のほうが経験前よりも精神的に安定したと感じる	.67	.38	.59
10 性交渉経験後のほうが経験前よりも交際相手に甘えやすくなった	.64	.37	.54
【第2因子】自己への信頼の高まり(自己信頼) $\alpha = .87$			
6 性交渉経験後のほうが経験前よりも他人にやさしくなった	.23	.81	.71
7 性交渉経験後のほうが経験前よりもちょっとしたことで喜びを感じる	.28	.81	.73
8 性交渉経験後のほうが経験前よりも生きている実感がある	.20	.70	.52
9 性交渉経験後のほうが経験前よりも精神的に成長した気がする	.36	.61	.50
5 性交渉経験後のほうが経験前よりも自分に自信がもてるようになった	.43	.58	.52
因子寄与	3.45	2.98	6.43
寄与率(%)	34.52	29.79	64.31

## 3. 性交渉による肯定的な情動体験のジェンダー差

性交渉による肯定的な情動体験にジェンダー差があるかどうかについてt検定を行ったところ、「相手信頼」、「自己信頼」ともに有意差は見られなかった(相手信頼:  $t = 0.42$ , n.s.; 自己信頼:  $t = 1.63$ , n.s.) (表4)。この結果と平均値を見ると、ジェンダー間に差がないと解釈できる。

表4 交渉による肯定的な情動体験のジェンダー差

	男性		女性		t 値
	M	SD	M	SD	
相手信頼	14.65	4.31	14.32	4.10	0.42
自己信頼	11.19	4.14	10.12	3.43	1.63

## 4. ジェンダーと性交渉による肯定的な情動体験の高低によるデートDV被害経験の差

### 1) ジェンダーと相手信頼によるデートDV被害経験の差

ジェンダーと性交渉による肯定的な情動体験のうちの

相手信頼の高低によりデート DV 被害経験に差があるかについて検討するために、2 要因分散分析を行った。その際、性交渉による肯定的情動体験尺度得点の平均以上の者を「高群」、平均未満を「低群」として分析を行った。その結果、「身体・脅迫」においてジェンダーの主効果が有意であった ( $F(1,185) = 12.09, p < .01$ ) (表 5)。この結果と平均値から、相手信頼の高さに関わらず、男性は女性よりも「身体・脅迫」被害を受けることが多いと解釈することができる。

表 5 デート DV 被害と相手信頼との関連

被害	性別	男性		女性		主効果		交互作用
		低	高	低	高	ジェンダー	相手信頼	
被害	身体・脅迫	10.29 (5.35)	11.80 (5.97)	8.96 (4.71)	7.85 (4.43)	8.97**	0.05	2.19
	性的暴力	6.94 (4.64)	5.90 (3.45)	5.57 (3.52)	5.36 (3.57)	2.03	0.87	0.39
	自尊感情低下	11.76 (7.95)	12.10 (7.73)	10.64 (5.78)	10.31 (4.68)	1.86	0.00	0.96
	孤立	6.41 (3.94)	6.15 (4.27)	5.22 (3.19)	5.29 (3.38)	2.59	0.02	0.07

上段：平均値 下段：標準偏差  
\*\* $p < .01$

## 2) ジェンダーと自己信頼によるデート DV 被害経験の差

ジェンダーと性交渉による肯定的な情動体験のうちの自己信頼の高さでデート DV 被害経験に差があるかについて検討するために、2 要因分散分析を行った。その際、相手信頼に関する分析と同様に性交渉による肯定的情動体験尺度得点の平均以上の者を「高群」、平均未満を「低群」として分析を行った。その結果、すべてのデート DV 加害経験における交互作用が有意であった (身体・脅迫： $F(1,185) = 6.58, p < .01$ ; 性的暴力： $F(1,185) = 8.62, p < .01$ ; 自尊感情低下： $F(1,185) = 5.11, p < .05$ ; 孤立： $F(1,185) = 4.14, p < .05$ ) (表 6)。

さらに、各交互作用における単純主効果を検討するために LSD 検定を実施した。「身体・脅迫」に関しては、自己信頼の低い群において、性別の単純主効果が有意であり、男性のほうが女性よりも「身体・脅迫」被害が多かった ( $F(1,185) = 16.17, p < .001$ )。また、男性において、自己信頼の単純主効果が有意であり、自己信頼の低い者のほうが自己信頼の高い者よりも「身体・脅迫」被害が多かった ( $F(1,185) = 6.22, p < .01$ )。

「性的暴力」に関しては、自己信頼の低い群において、性別の単純主効果が有意であり、男性のほうが女性よりも「性的暴力」被害が多かった ( $F(1,185) = 9.88, p < .01$ )。また、男性において、自己信頼の単純主効果が有意であり、自己信頼の低い者のほうが自己信頼の高い者よりも「性的暴力」被害が多かった ( $F(1,185) = 7.57, p < .01$ )。

「自尊感情低下」に関しては、自己信頼の低い群において、性別の単純主効果が有意であり、男性のほうが女性

よりも「自尊感情低下」被害が多かった ( $F(1,185) = 6.77, p < .01$ )。また、男性において、自己信頼の単純主効果が有意であり、自己信頼の低い者のほうが自己信頼の高い者よりも「自尊感情低下」被害が多かった ( $F(1,185) = 3.90, p < .05$ )。

表 6 デート DV 被害と自己信頼の関連

被害	性別	男性		女性		主効果		交互作用
		低	高	低	高	ジェンダー	自己信頼	
被害	身体・脅迫	13.47 (5.82)	9.50 (5.08)	8.13 (4.03)	8.71 (5.28)	11.91**	3.65	6.58**
	性的暴力	8.33 (4.81)	5.05 (2.77)	5.20 (3.17)	5.83 (4.00)	3.12	4.00*	8.62**
	自尊感情低下	14.20 (10.11)	10.41 (5.30)	10.03 (4.60)	11.08 (5.97)	2.67	1.65	5.11*
	孤立	7.40 (4.98)	5.50 (3.20)	4.97 (3.11)	5.67 (3.50)	3.14	0.88	4.14*

上段：平均値 下段：標準偏差  
\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

「孤立」に関しては、自己信頼の低い群において、性別の単純主効果が有意であり、男性のほうが女性よりも「孤立」被害が多かった ( $F(1,185) = 6.48, p < .01$ )。

これらの結果から、デート DV 被害経験の多い男性は性交渉により自己肯定感を持ちにくいことが示された。

## 3) まとめ

相手信頼については関連が見られず、自己信頼についてのみ、男性において自己信頼の低さとデート DV 被害との関連が見られ、デート DV 被害経験の多い男性は性交渉により自己肯定感を持ちにくいことが示された。

## 5. ジェンダーと性交渉による肯定的な情動体験の高低によるデート DV 加害経験の差

### 1) ジェンダーと相手信頼によるデート DV 加害経験の差

ジェンダーと性交渉による肯定的な情動体験のうちの相手信頼の高低によりデート DV 加害経験に差があるかについて検討するために、2 要因分散分析を行った。その際、デート DV 被害経験に関する分析と同様に性交渉による肯定的情動体験尺度得点の平均以上の者を「高群」、平均未満を「低群」として分析を行った。その結果、「自尊感情低下」においてジェンダーの主効果が有意であった (性別： $F(1,185) = 4.42, p < .05$ ) (表 7)。これらの結果と平均値から、相手信頼の高さに関わらず、男性

表 7 デート DV 加害と相手信頼の関連

加害	性別	男性		女性		主効果		交互作用
		低	高	低	高	ジェンダー	相手信頼	
加害	身体・脅迫	7.18 (4.22)	8.55 (5.99)	7.38 (3.83)	7.95 (4.27)	0.06	1.51	0.25
	性的暴力	4.65 (2.18)	5.50 (3.79)	4.53 (2.83)	5.10 (3.36)	0.20	1.53	0.06
	自尊感情低下	9.06 (4.19)	8.55 (3.56)	7.44 (1.91)	8.10 (2.61)	4.42*	0.02	1.41
	孤立	4.41 (2.32)	4.60 (3.00)	3.82 (1.85)	4.56 (2.66)	0.55	1.12	0.39

上段：平均値 下段：標準偏差  
\* $p < .05$

は女性よりも「自尊感情低下」加害をすることが多いと解釈することができる。

## 2) ジェンダーと自己信頼によるデート DV 加害経験の差

ジェンダーと性交渉による肯定的な情動体験のうちの自己信頼の高さでデート DV 加害経験に差があるかについて検討するために、2 要因分散分析を行った。その際、相手信頼に関する分析と同様に性交渉による肯定的情動体験尺度得点の平均以上の者を「高群」、平均未満を「低群」として分析を行った。その結果、「身体・脅迫」、「性的暴力」及び「自尊感情低下」における交互作用が有意であった（身体・脅迫： $F(1,185) = 5.33, p < .05$  性的暴力： $F(1,185) = 4.39, p < .05$ ; 自尊感情低下： $F(1,185) = 10.21, p < .01$ ）（表 8）。

さらに、各交互作用における単純主効果を検討するために LSD 検定を実施した。

「身体・脅迫」に関しては、男性において、自己信頼の単純主効果が有意であり、自己信頼の低い者のほうが自己信頼の高い者よりも「身体・脅迫」加害が多かった（ $F(1,185) = 4.22, p < .05$ ）。

「性的暴力」に関しては、自己信頼においても性別においても有意な単純主効果が見られなかった。

「自尊感情低下」に関しては、自己信頼の低い群において、性別の単純主効果が有意であり、男性のほうが女性よりも「自尊感情低下」加害が多かった（ $F(1,185) = 13.64, p < .001$ ）。また、男性において、自己信頼の単純主効果が有意であり、自己信頼の低い者のほうが自己信頼の高い者よりも「自尊感情低下」加害が多かった（ $F(1,185) = 6.72, p < .01$ ）。さらに、女性において、自己信頼の単純主効果が有意であり、自己信頼の高い者のほうが自己信頼の低い者よりも「自尊感情低下」加害が多かった（ $F(1,185) = 3.88, p < .05$ ）。

これらの結果から、男性においては「身体・脅迫」と「自尊感情低下」の加害経験が多い者は性交渉により自己肯定感をもちにくいことが示された。一方、女性では「自尊感情低下」の加害経験が多い者は性交渉により自己肯定感をもちやすいことが示された。

表 8 デート DV 加害と自己信頼の関連

性別	男性		女性		主効果		交互作用	
	低	高	低	高	ジェンダー	自己信頼		
加害	身体・脅迫	9.67 (6.58)	6.73 (3.78)	7.37 (3.91)	8.11 (4.27)	0.32	1.90	5.33*
	性的暴力	6.27 (3.37)	4.32 (2.78)	4.63 (3.03)	5.11 (3.26)	0.53	1.60	4.39*
	自尊感情低下	10.13 (4.88)	7.86 (2.62)	7.44 (1.21)	8.29 (3.26)	5.43*	2.12	10.21**
	孤立	4.80 (2.78)	4.32 (2.64)	3.84 (2.03)	4.71 (2.55)	0.41	0.20	2.39

上段：平均値 下段：標準偏差

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

## 3) まとめ

男性においては「身体・脅迫」と「自尊感情低下」の

加害経験が多い者は性交渉で自己肯定感をもちにくいことが示された。一方、女性では「自尊感情低下」の加害経験が多い者は性交渉で自己肯定感をもちやすいことが示された。

## IV. 考察

### 1. ジェンダーによるデート DV 経験の差

本研究において、男性は女性よりもすべてのデート被害経験を多くもつことが見出された。内閣府（2015）のデート DV に関する調査では、女性のほうが男性よりも被害を受けていることが示されており一般的には女性のほうが被害経験が多いと言われている。しかし、男性のほうが身体的暴力被害を多く受けていることを示す研究がいくつか存在し（上野，2014）、本研究においても男性のほうが被害経験を多くもつことが見出された。「女性は常におだやかであるはず」というステレオタイプの性別役割観を男性がもっているがために、女性のちょっとした感情的な言動を暴力と認識しやすいことで女性よりも被害経験が多くなることが予想される。男女平等の意識が高まりつつある現代において、これまで見られていたデート DV 被害に関するジェンダー差は今後変化する可能性がある。従って、被害経験におけるジェンダー差についてどのように変化するのか今後も追う必要があると思われる。

また、本研究において、「身体・脅迫」以外のデート DV 加害経験は男性の方が多いということが示されている。性交渉の有無に関わらず男性のほうが女性よりもこれらの加害経験が多く見られることから、性交渉をもたない比較的親密度の浅い関係においても男性が行いやすい加害行為であるとも考えられる。従って、男性のデート DV 加害行為は性交渉をもつ以前の関係性で喚起される情動問題をはらんでいることが予想される。

### 2. 性交渉経験の有無によるデート DV 経験の差

本研究において、性交渉経験をもつ者はもたない者よりもデート DV 被害を受けることが多いことが見出された。また、性交渉経験をもつ者はもたない者よりも「身体・脅迫」加害と「性的暴力」加害をすることが多いことが見出された。これらの結果は、Kaestle and Halpern (2005) の結果をほぼ支持した。青年は性交渉経験を伴う恋愛経験が少ないために、性交渉をすると交際相手が自分のものになった、あるいは自分が交際相手のものになったと勘違いしてカップル間で束縛を強める傾向がある（伊田，2010）。こうした傾向が性交渉のあるカップルのほうがないカップルよりもデート DV の生じやすさにつながると考えられる。ただし、「自尊感情低下」と「孤立」加害においては性交渉の有無で差が見られなかった。この

ことから自尊感情を低下させる、あるいは孤立させる行為はそれほど相互作用が深まらない関係性においても容易に生じやすいデートDVであると考えられ、自尊感情低下加害や孤立加害がみられた時点ですぐに解決に向けて当事者や周囲の者が対処することがデートDVの深刻化の予防につながると考えられる。

### 3. デートDV被害と性交渉による肯定的な情動体験との関連

本研究において、自己信頼についてのみ、男性において自己信頼の低さとデートDV被害との関連が見られ、デートDV被害経験が多い者は性交渉によって自己肯定感をもちにくいことが示された。男女平等意識が高まった現代においても、性交渉では男性が女性をリードすることが求められる傾向にある(田中, 1996)。つまり性交渉では、男性は自分自身が交際相手のニーズを満たすことができているかどうかに関心が強く、そうした自分への信頼を高めることを重視すると考えられる。さらには、交際相手が性交渉に乗り気ではない場合、男性は関係への不満のサインとネガティブにとる傾向が強く(田村・細谷・川畑・田中, 2012)、性交渉場面において交際相手からの自己への評価を押し量ろうとする傾向がみられる。こうしたことから自己信頼の高さとデートDV被害経験との関連が見られたと推察される。

一方、女性については性交渉による肯定的な情動体験とデートDV被害経験との間に関連は見られなかった。女性にとって性交渉は恋愛関係の他の場面とは意味の異なる場面と理解されている可能性がある。かなり以前の時代には女性には性的欲求がないと考えられていたため(Horney, 1967)、その影響が今も続き、男性と比べると女性が積極的に性的行動に及ぶことや、性的欲求があることを開示することを否定的に評価する傾向がある。こうしたことから、性交渉は他の恋愛場面とは意味の異なる場面となっており、性交渉によって生起する肯定的な情動体験とデートDV被害経験との関連も見られないと推察される。

### 4. デートDV加害と性交渉による肯定的な情動体験との関連

本研究において、自己信頼についてのみ、男性においては「身体・脅迫」と「自尊感情低下」の加害経験が多いと自己信頼が低いことが示された。一方、女性では「自尊感情低下」の加害経験が多いと自己信頼が高いことが示された。男性の場合は、デートDV被害経験と性交渉による肯定的な情動体験との関連の検討において前述したとおり、男性にとって性交渉は自己信頼を高める行為として重視されていると考えられ、その欲求不満がデートDV加害行為として表出される傾向があることを

示唆している。

一方、女性については、今も性交渉において男性優位であることを受け容れている傾向が一般的にある。そうしたことから、女性が性交渉場面で支配的になることで優越感を持ち、その結果自己信頼が高まっていると考えられると、自己信頼の高さと自尊感情低下加害の多さと関連するのは妥当であると推察される。現代においても女性が男性に比べると社会的及び経済的自立で不利な状況であるため、青年女性の場合、女性性の受容過程において、一時的に男性への敵意や競争を向けるといった神経症的徴候を示すことが指摘されている(Horney, 1967)。Horney(1967)によれば、この傾向は幼少期に適切な愛情関係を体験できないほど激しい。従って、性交渉経験により自己や相手への信頼を高めることに成功すると、抑圧していた交際相手である男性に敵意を示しやすくなり、自尊感情低下のデートDV加害に及ぶのではないかと考えられる。こうした、性交渉で男性優位の関係性を求められることと女性性の受容のしにくさが影響して、性交渉で交際相手の男性を立てるかわりに、性交渉以外の恋愛場面において交際相手の男性に敵意を向けて支配的になることで自己や交際相手への不満を補っていることが予想される。

ただし、自己信頼の高まりにくさと「孤立」加害との関連が見られなかった。これは、恋愛関係自体が基本的に排他性を内包しているため、「孤立」加害という過剰な独占性の表明が性交渉による肯定的な情動体験の質の影響を受けないということを表していると考えられる。

### 5. 総合考察

本研究で提案した「① 性交渉のあるカップルのほうが、性交渉のないカップルよりもデートDV被害経験、加害経験ともに多い」「② デートDV被害経験の多さは性交渉による肯定的な情動体験の少なさと関連する」及び「③ デートDV加害経験の多さは性交渉による肯定的な情動体験の少なさと関連する」のうち、①はほぼ支持され、②と③についても男性において一部支持された。

本研究の結果から、恋愛関係の関係性の質の良し悪しが、性交渉という恋愛関係において最も相互作用の深い場面の1つの質の良し悪しに関係する、そして、デートDV経験が性交渉による肯定的な情動体験と関連するという点では男女共通と考えられた。しかし関連の仕方にジェンダー差が見られた。これは、性交渉が男性では自己信頼の高まりを重視し、交際相手との信頼関係の深さを確認するのに対し、女性は性交渉を他の恋愛関係場面とは異なる意味をもつ場面として捉えていることによると考えられる。さらには男性のほうが交際相手への依存度が大きいこともジェンダー差を生み出していると考えられる。

青年期という時期は恋愛経験が人格的成長と密接につながる時期である(井ノ崎, 2016)。男性にとっても女性にとっても青年期はアイデンティティの確立に向けて自己のあり方を模索している時期であり, 男女とも十分に精神的自立しているとは言えず, 恋愛関係の中で心理的にバランスを崩し, 意図せずして交際相手に心理的ダメージを与える行動を起こしてしまうことが予想される。デートDVは決して許されることのない問題行動であるが, 自己の模索過程において残念ながらデートDVを行ってしまう, あるいは交際相手の自己の模索過程に巻き込まれてデートDVの被害を受けてしまったのであれば, 関係性を見直すとともに, そこからアイデンティティの確立に向けて健全な方向に自己を形成する道を探ることが肝要であると思われる。

恋愛関係とセクシュアリティは不可分の関係にある。青年期においてセクシュアリティの問題は重要なテーマの1つであり, 性的アイデンティティの発達とともに成熟した恋愛関係を形成できるようになると考えられる(伊藤他, 2012)。つまり性的アイデンティティの確立は成熟した性交渉の達成を含めた成熟した恋愛関係の達成により成立し, その性的アイデンティティの確立は全般的なアイデンティティの確立の一端を担うのである。

したがって, 効果的なデートDV予防を実現するためには, 単にデートDVの生起に焦点を当てるのではなく, 青年の心理的発達促進という観点から性的アイデンティティを含むアイデンティティの確立の模索過程との関連を考慮することが重要であると考えられる。

なお, 本研究ではデートDV被害及び加害経験の程度や, 性交渉による肯定的な情動体験と精神的健康度との関連を検討しなかったため, 今後検討を要する。また, 性交渉による肯定的な情動体験が生じる具体的な出来事については本研究では尋ねていないため, どのような出来事によって性交渉による肯定的な情動体験を生み出すのかについても今後検討する必要がある。さらに, 本研究では, デートDV被害を受けたと認識している男性が多いのに対し, デートDVを行ったと認識している女性が少ないという矛盾した結果が見られた。女性が男性のほうが優遇されているという思い込み, デートDV加害行為を当然の権利として認識していることから本研究のような結果が生じたのではないかと推察されるが, この点についても今後さらに検討をする必要がある。

## V. 引用文献

赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子 2017 デートDVにおける暴力の頻度と精神的ダメージ: ジェンダーと暴力の双方向性への着目 人間文化学部紀要, 17, 56 - 68.

- 井ノ崎敦子 2016 親密な関係における暴力—デートDVについて学ぶ 青野篤子編著 アクティブラーニングで学ぶジェンダー ミネルヴァ書房, 85 - 97.
- Horney, K. 1967 *Feminine Psychology* W. W. Norton & Company, Inc. (泉ひさ訳 1971 女性の深層心理 黎明書房)
- 伊田広行 2010 デートDVと恋愛 大月書店
- 伊福麻希・徳田智代 2006 恋愛依存傾向尺度の試み—男女間における恋愛依存傾向の比較— 久留米大学心理学研究, 5, 157 - 162.
- 伊福麻希・徳田智代 2008 青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討 久留米大学心理学研究, 7, 61 - 68.
- 伊藤和也・滝澤武・横山明子・古玉佐知子 2012 コミュニティ心理学からみるQOLを高める学生相談活動2—帝京大学宇都宮キャンパスにおける青年期のセクシュアリティへの心理教育— 帝京大学学生カウンセリング研究, 創刊, 51 - 56.
- Kaestle, C. E., & Halpern, C. T. 2005 Sexual intercourse precedes partner violence in adolescent romantic relationships. *Journal of Adolescence Health*, 36, 386-92.
- 国立青少年教育振興機構 2016 若者の結婚観・子育て観等に関する調査 [結果の概要] (<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/111/File/gaiyou.pdf> 2017年8月13日アクセス)
- 国立社会保障・人口問題研究所 2017 第15回出生動向基本調査 ([http://www.ipss.go.jp/psdoukou/j/doukou15/NFS15\\_reportALL.pdf](http://www.ipss.go.jp/psdoukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf) 2017年8月13日アクセス)
- 今野裕之 1999 恋愛関係における統制感について 筑波大学心理学研究, 22, 149 - 154.
- 明治安田生活福祉研究所 2016 20~40代の恋愛と結婚—第9回結婚・出産に関する調査より— ([http://www.myilw.co.jp/research/report/pdf/myilw\\_report\\_2016\\_01.pdf](http://www.myilw.co.jp/research/report/pdf/myilw_report_2016_01.pdf) 2017年8月15日アクセス)
- 内閣府 2015 男女間における暴力に関する調査(平成26年度調査) ([http://www.gender.go.jp/policy/no\\_violence/evaw/chousa/h26\\_boryoku\\_cyousa.html](http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/evaw/chousa/h26_boryoku_cyousa.html) 2017年8月12日アクセス)
- 齋藤益子・木村好秀 2000 中高年女性の性的生活意識: 第1報 女性心身医学5, 47 - 53.
- Soller, B., Haynie, D. L., & Kuhlemeier, A. 2017 Sexual intercourse, romantic relationship inauthenticity, and adolescent mental health, *Social Science Research*, 64, 237-248.
- 田中公江・細谷実・川畑智子・田中俊之 2012 大学生の性意識調査 国際社会文化研究所紀要, 14, 259 - 304.
- 田中欣和 1996 性教育の意義と課題—自立と共生の

教育 石元清英他著 ワークブック ジェンダーとセクシュアリティー〈性〉と〈生〉を考えるー 嵯峨野書院, 175 - 204.

立脇洋介 2005 異性交際中の出来事によって生じる否定的感情 社会心理学研究, 21, 21 - 31.

立脇洋介 2007 異性交際中の感情と相手との関係性 心理学研究, 78, 244 - 251.

Tolman, D. L., & McCllland, S., I., 2011 Normative Sexuality Development in Adolescence: A Decade in Review,2000-2009, Journal of Research on Adolescence, 21, 242-255.

上野淳子 2014 デートDV研究の問題点 四天王寺大学紀要, 57, 195 - 205.

